

日本の福祉における仏教の存在についてのベトナム国の関心

ーベトナム国における仏教を社会的背景とした福祉活動の実態ー

○ 淑徳大学大学院 佐藤 成道 (7983)

田宮 仁 (淑徳大学・1069)、渋谷 哲 (淑徳大学・2022)、藤森 雄介 (淑徳大学・2911)、

梅原 芳江 (淑徳大学大学院・8056)、河本 秀樹 (淑徳大学大学院・6497)

キーワード：仏教・仏教福祉・ベトナム国

1. 研究目的

2012(平成24)年3月、ベトナム国立社会人文科学大学(以下USSH)からの「ソーシャルワークにおける仏教の役割」をテーマとした共同研究が開始された。これは、淑徳大学チーム・USSHチーム・社会事業大学/APASWEチームの3者による国際共同研究である。

同年の11月には、秋元樹 APASWE 会長(当時)立ち会いのもと「ベトナム国立社会人文科学大学ハノイと淑徳大学との学術連携協定書」(MOU)の調印・交換を行った。共同研究開始から、北部(ハノイ)・南部(ホーチミン)へそれぞれ2回、中部(フエ)へは1回の実態調査研究を行なった。これ以外に、年1回の合同ワークショップを開催している。

この研究の全体構想・最終目的は、ベトナム国民の80%以上を占める仏教徒の存在を念頭に、これからのベトナム国におけるソーシャルワークの展開計画において、仏教の理念や方法技術の活用を提言して欲しいという要請に応えることである。

そこで、本研究では、ベトナム国のソーシャルワークにおいて仏教が果たしてきた役割の歴史的経過を踏まえた実態調査を始めた。それは、渦中にある不可欠な研究としての「ソーシャルワークにおける仏教の役割」に関する日本とベトナム国との比較研究を通じたアジア的ソーシャルワークの可能性を探ることでもある。

社会主義国のベトナム国が、同国の今後のソーシャルワーク展開に仏教の活用を意図した提言を要請し共同研究を提案してきたことに対して、仏教系大学である淑徳大学に身を置き、しかも「仏教とソーシャルワーク」の問題に関心を持ち研究と実践に携わっている本研究メンバーは、ベトナム国というフィールドを踏まえての本研究の重要性と意義を認識し、研究活動に着手した。なお、本研究が「ソーシャルワークにおける仏教の役割」ということで、日越比較研究をすることは、たんに日越に限らず、今後、仏教が伝わったアジア諸国において、その福祉活動推進に寄与できるものと考えている。

前回の本学会における自由研究発表では、副題を「ハノイ国家大学との共同研究開始で前提とすること」とし、本研究の置かれている現代日本の社会福祉研究の状況を捉えるために、「仏教と社会福祉の研究状況」や「仏教社会福祉研究におけるベトナムに関する研究」などについてまとめた。今回の報告では、ベトナムで実態調査研究を進める中で見えてき

た「ベトナム国における仏教を社会的背景とした福祉活動の実態」を明らかにし、社会福祉におけるアジア、そして世界を意識した日本を探求するときに必要なことを追究する。

2. 研究の視点および方法

ベトナム国と日本の両国において、福祉と仏教との関係を比較研究するにあたっては、共通の基盤となる資料がない。そのため、基礎資料の作成を眼目とし、ベトナム国の福祉活動について現地訪問やインタビューによる聞き取り調査などを行い、ベトナム仏教や同国の社会福祉の展開状況、教育システム、産業化・近代化に伴い惹起している社会問題等の情報収集も行う。

3. 倫理的配慮

本研究はベトナム国での現地調査を中心とした研究であり、配慮が必要な場合には、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守するものである。

4. 研究結果

ベトナム国における最初の仏教伝播は、史資料に残る事実としては2世紀末頃である。インド以外に中国の僧侶の影響があり、上座部にも大乘にも影響を受け、禅や密教など様々な教えが伝わるなど、仏教の南北の交流拠点ともいべき性格を有してきた。儒教の影響で一時は衰退した時期もあったが、19世紀以降、仏教がベトナム国の精神的基盤を支えていると言っても過言ではない。

日本と似通った歴史経過を辿ってきたベトナム国だが、日本に比して「記録を残す」という習慣があまりないばかりか、戦乱とそれに伴う社会的混乱で史資料の多くが散逸しており、ベトナム国の研究において、日本との比較や分析のための史資料が十分ではない。だが、現在行われている寺院及び僧職者の福祉的実践の多くが、社会的混乱が収束し安定を得始めた1980年代後半以降に開始されている。つまり、実践を始めた創設者、または開始当初を知る関係者の多くが現役であり、彼らのオーラルヒストリーこそが、貴重な資料となり得る。

実態調査研究を通して見えてきた仏教を社会的背景とした福祉活動の実態としては、寺院運営の施設を中心に、経済的理由や福祉対象を限定せず求められれば可能な限り受け入れ、基本的には無料で行われている。各種メディアで寺院の活動が取り上げられることもあり、寺院には地域の住民のみならず、多くの人が集まり活動に参加している。仏教を社会的背景としているベトナム国では、福祉活動は、社会全体で行為の能所に関係なく共有され、専門職か否かに拘わらず社会で取り組むべきこととして日常化されている。

5. 考察

ベトナム国では、寺院運営の施設に限らず、それ以外の公的・私的な施設でも、仏教の教えを大切にしているところが少なくない。現代日本の社会福祉において、福祉と仏教との関係を論じようとする空気すら希薄になっているが、このような違いは、なぜ生じているのだろうか。